
ビー玉。

神谷 美琴

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ビー玉。

【Nコード】

N3193A

【作者名】

神谷 美琴

【あらすじ】

コロコロと転がるビー玉。手にとって覗き込む。そこから見えた景色は……。

ケイタ、知ってる？

ビー玉って綺麗だけじゃないんだよ。

これを持っているとね、素敵なことが起こるんだって。
だからね、ケイタにも分けてあげる。

手に転がしてみるビー玉。

昔から・・・いや、あの時から大切にしている。

だって彼女が言ってたから。

笑いながら彼女が言ってたから。

『素敵なことが起こる』って。

別に信じている訳じゃない。

だって、嘘のような話だから。

でも彼女は、それなのに笑顔で言ったんだ。

信じられない訳ないじゃないか。

寧ろ、信じてみたい。

彼女が言った通り、何か起こるんじゃないかって。

・・・起こるって。

「ほれケイタ、ゲンキ出しなよ！」

笑っている彼女、ユキはケイタの背を叩く。

別に落ち込んでいる訳じゃないんだが、ユキにはそう見えているみたいだ。

ユキの長い黒髪が、窓から入る風で揺れている。

その風は、すごく心地良かった。

白いだけのこの部屋に、何かを運んでくるみたいに。

ケイタは無言でユキを見る。

「はいはい、これ以上何も聞かないから。それよりも、アレ……失くしてないでしょうね」

ユキが覗き込んでくる。ケイタは慌ててそれを出す。

それは、青と黄色とピンクのビー玉だった。

「よし！ちゃんと持ってたよね。お守りなんだから」

ケイタはやっぱり無言で話を聴くだけだった。

「絶対持ってたね……。失くさないでね」

ユキの言葉を聴いたのは、それが最後だった。

彼女は、ここから旅立ったから。

彼女は最期まで笑っていた。笑ってたんだ。

「ユキ姉……。俺、元気だよ」

この手の中にあるビー玉は、俺の宝物なんだ。

彼女が言ったから。

持ってたって。失くさないでって。

あの時の俺は、小学生だった。

でも、その言葉の意味ぐらい分かっていた。多分彼女は……、

『願っていてほしかった』んだ。手術が成功しますようにって。

素敵なことが起こるって言っていた、このビー玉。
見る度に彼女を思い出す。笑っている彼女を。

覗き込むビー玉には、遠くの景色が透けて見えた。

そこには彼女が立っているように見えて、泣きなくなった。
俺にとって、たったひとりの姉だから。

でも泣かないよ。悲しくたって。

このビー玉に彼女の想いが込められているから。

それだけで、彼女を感じることができるから。

彼女を忘れないでいられるから。

『素敵なこと』

生きていればきっと、何かひとつは起こるだろう。
このビー玉がある限り。

ユキ姉、俺・・・ユキ姉が俺の姉で良かったよ。誇りだよ。
生きるから。

ユキ姉が生きたいって望んだみたいに、俺も望んでいきたい。
素敵なことが起こるまでずっと・・・。

ユキ姉の分、一生懸命生きるから。

一生懸命生きるから・・・。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3193a/>

ビー玉。

2010年12月8日14時35分発行